

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 日本の拳遊戯（下）

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2015-09-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 浩徳, TAKAHASHI, Hironori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/50">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/50</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 日本の拳遊戯（下）

高橋 浩徳

## 第7章 じゃんけん

### 1. じゃんけんの概要

現在、日本において、人口的にも回数的にも最も多く行われている遊戯はじゃんけんであろう。だがその出自は謎に包まれており、研究もほとんどない。じゃんけんのかけ声を収集したり、じゃんけんを使う遊びを収集したりした本はあるが研究らしきものは見えない。独自に研究しているような書籍やインターネットのサイトなども散見されるが、少ない情報で判断していたり、根拠のない情報によっていたりして理論的と言えるものはない。何よりも多くの点で誤っているのは、拳遊戯の一つでしかない「じゃんけん」を拳遊戯の総称のように用いているものが多いことである。

本章で取り上げるじゃんけんは、グーとチョキとパーの3つの形からなる3すくみ拳である。基本的には手を用いて、何らかの掛け声の後に同時に手でグー、チョキ、パーのいずれかを出し勝敗を決める。グーは石を表し、握りこぶしを出す。チョキは鋏を表し、握りこぶしから親指と人差し指、または人差し指と中指の2本を伸ばす。パーは紙を表し、指をすべて伸ばして掌を見せる。出す際には何らかの掛け声をかけ、全員が同時に出すようにする。勝敗は、紙は石に勝ち、石は鋏に勝ち、鋏は紙に勝つ。したがって、2種類しか出ていないときに限り勝敗がつき、それ以外はやり直しとなる。

これが一般的なものだが、出すものを2種類に限定したものがあり、「グーパーじゃん（けん）」などと呼んで、全体を2つに分ける場合や、人数が多いために3すくみのままではなかなか勝負がつかない恐れがある場合に人数を減らす目的で行われる。また以上のじゃんけんの前に歌や動作を入れるものや、じゃんけんをしてその結果で別な遊戯を行うものがある。また基本的には片手で行うが、手を使わずに足を使う足じゃんけ

んや口の形で行う口じゃんけんなどが存在する。

## 2. じゃんけんの歴史

### (1) 江戸時代のじゃんけん

じゃんけんは石拳とも呼ばれた。この拳が歴史に登場するのは思ったより新しく、江戸時代にはほとんどじゃんけんの記述がない。

歌川広重（寛政九（1797）年～安政五（1858）年）の「ふうりゅうおさなあそび」（文政十三（1830）年）には子供がじゃんけんらしきものをしている絵がある。2人のこどもがゲーとチョキを出しているように見えるが、それはこの遊戯がじゃんけん



【図62 「ふうりゅうおさなあそび（部分）」】

あった場合である。これまでに示した拳では本拳や球磨拳がこの絵と同じ絵になる場合がある。一方が0でもう一方が2を出している場合である。本拳は主に大人が行ったもので、これは子供が行っているのでじゃんけんである可能性は高いが、本拳を子供が行わなかったとは言えない。また本拳はもう一方の手で勝った数を数えるのだが、この絵の子供はそうは見えないのでじゃんけんの可能性が高い。しかし本拳は常に五本勝負というわけでは無かった。したがってこの絵はじゃんけんとは断定はできないのだが、この絵のこの部分を解説している書籍はじゃんけんとしている<sup>89)</sup>。

江戸川柳を集めた『俳風柳多留』（天保九（1838）年）156巻に「リヤン拳で鉄を出すは花屋の子 花童」という句がある。鉄があることからこのリヤン拳はじゃんけんのことと考えられる。

西沢一鳳（享和二（1802）年～嘉永五（1853）年）の随筆『みやこのひるね皇都午睡』（嘉永三

日本の拳遊戯（下）

（1850）年には、

「近頃東都にてはやりしはジャン拳也。酒は拳酒色品は蛙ひとひよこ三ひよこ／＼蛇ぬら／＼ジャンジャカジャカ／＼ジャンケンナ婆様に和唐内が呵られて虎がハウ／＼トテロテンなめくでサア来なせへ。」

という文章がある。この文に「ジャン拳」「ジャンケンナ」という表記があることから、このときじゃんけんがあったという意見もあるが、後に書かれているのはとてつる拳<sup>90</sup>の歌詞である。ここには虫拳の手である蛙、蛇、蛞蝓と虎拳の手である婆様、和唐内、虎が登場する。ジャンケンナは囃子の三味線の音と解すべきであろう。したがって「近頃東都にはやるジャン拳」というのは石紙鉄のじゃんけんではない。

塵哉翁（正没年不詳）の随筆『巷街贅説』には弘化四（1847）年のこととして、

「ことし未の春より流行するとてつる拳じゃんじゃがぶし、酒は拳ざけいろしなは、暮（かいる）ートひよこ三ひよこ／＼。」

と書かれている。ここではとてつる拳をじゃんじゃがぶしと呼んでいる。とてつる拳、もしくはとてつる拳から始まった所作拳を、三味線の囃子からであろうか、じゃんじゃが節と呼んだと考えられる。

江戸時代にじゃんけんらしきもの登場するのはこれぐらいであり、とても石紙鉄の拳があったと断定することはできない。逆に子供の拳を示したものでじゃんけんがない資料は多い。先の章で取り上げた『拳会角力図会（下）』（文化六（1809）年）では子供がしているのは虫拳である。柴村盛方（生没年未詳）の随筆『飛鳥川』（文化七（1810）年）には、

「子供寄集まり<sup>はなしあいなど</sup> 咄合杯 互いにいたすに、大方爺は山へ柴かり、婆は川へ洗濯などと云昔咄し専也しに、今は虫拳狐拳本の拳などするもおかし。」

とあり、喜多村信節（天明三（1783）年～安政三（1856）年）の風俗百科辞典『嬉遊笑覧』（文政十三（1830）年）の「搦戦」の項でも、本拳や拳相撲の記述をした後、

「右の拳より後さま／＼の拳出きぬれど、行はるゝは狐拳なり。虫拳などは唯童部のなぐさみ也。蛙と蛇と蛞蝓、相制するをもて勝負をなす。」

とあってじゃんけんの記述はない。<sup>こでらぎょくちよう</sup>小寺玉晁（寛政十二（1800）年～明治十一（1878）年）が子供の遊びを集めた『尾張童遊集』（天保二（1831）年）にも庄屋拳と虫拳の絵があるがじゃんけんはない。

万亭応賀（文政二（1819）年～明治二十三（1890）年）著、静斎英一画の<sup>おさなあそび</sup>『幼稚遊

むかしひながた

『昔雛形』(天保十四(1843)年)にも子供の遊びが多く描かれているが、拳遊びは虫拳と狐拳でじゃんけんはない。

江戸時代に石紙鉄の拳があったということも、じゃんけんという名称の拳があったということも極めて疑わしく、むしろ無かったといっても良いくらいじゃんけんの記述はない。筆者も他の論同様にじゃんけんは江戸時代には存在していたと考える。しかしその理由は、以降の章で述べるように明治時代の初期にじゃんけんが存在していたことが明らかになっており、短期間に広まったとは考えにくいので江戸時代には存在していたと考えるからである。しかし、上記のように1800年代のいくつかの拳の資料に見えないことから、広まったのは江戸時代末期かそれ以降と考える。



【図63 庄屋拳(『尾張童遊集』)】



【図64 虫拳(『尾張童遊集』)】



【図65 狐けん(『幼稚遊昔雛形』)】



【図66 虫けん(『幼稚遊昔雛形』)】

(2) 明治時代のじゃんけん

明治になると、じゃんけんを示す言葉がいくつも現れる。明治七（1871）年四月より明治七（1875）年まで日本に滞在していたアメリカの学者ウィリアム・グリフィス（William E Griffis、1843年～1928年）の『The Mikado's Empire』には、

「One is called "Ishi-ken," in which a stone, a pair of scissors, and a wrapping-cloth are represented. The stone signifies the clenched fist, the parted fore and middle finger the scissors, and the curved forefinger and thumb the cloth.」（その一つは「石拳」といって手が石、はさみ、風呂敷を表す。石は拳ではさみは人さし指と中指を開いて、ふるしきは人差し指と親指をまげて示す。）」<sup>1)</sup>

と石拳を説明している。パーであろう風呂敷が親指と人差し指を曲げるとあり、ok サインのようであるが名称は Ishi-ken（石拳）で手は石と紙と鉄であり、じゃんけんのことと考えられる。ただ、グリフィスはこれをじゃんけんとは呼んでいない。

雑誌『風俗画報』の51号から62号に大槻如電（弘化二（1845）年～昭和六（1931）年）の「拳の話」が連載された。明治二十六（1893）年の第60号には、

「石拳は石と紙と鉄との三なり。...打ち出しは虫拳の如くシ、シ、シ、とも云ひ又ヨイ、ヨイ、ヨイ、とも三つ掛声するを法とす。...さて石拳の一名をジャンケンと云ふは両拳をりやんけんといふより訛れりと説く人あれど恐らくは非なるべし。...案ずるにジャンは石の呉音なるジャクの訛りたる者とすべし。」

とある。ここで初めて石拳の別名がじゃんけんということが記述されている。

太田才次郎（元治元（1864）年～昭和十五（1940）年）編の『全国児童遊戯法』（明治三十四（1901）年）は全国の子供遊びを調査した本だが、その中でじゃんけんは下記のように複数採録されている。

「《東京》じゃん拳 これは云うまでもなく、紙、石、剪刀（はさみ）の三種にして、手を出す毎に「じゃん拳ぼん、すけるくさい」「じゃん拳ぼん、ちーりーさい」など唱え、又は単に「しっしっし」といえり。」

「《東京》拳遊び 幼児にありては普通の「ジャン拳」又は「虫拳」にて勝敗を争う位なるも、やや長じては左の詞<sup>ことば</sup>を各児<sup>ひとこえ</sup>一声に唱えつつ「ジャン拳」をなし、敗者は勝者に竹篋<sup>たけべら</sup>を受くるなり。一<sup>いっ</sup>チェー来なせえ猪尾助さん、蛇の目の<sup>ちよびすけ</sup>拳<sup>からかさ</sup>三階<sup>し</sup>で、四つちく鉄砲<sup>てつぱう</sup>五ウさいで、六<sup>む</sup>ねっぼうでジャン。又「狐拳」にては、唱句に合せその景状を手真似にてなし、最後に名主、鉄砲、狐を随意に出だすなり。」

「《東京》じゃん拳 これは左手と右手を互いに握り合せ、右手持てじゃんけんをなし、三回続いて勝ちをなしたる者は、右手にて負けし者の左手の甲を撃ち合うなり。」

「《伊勢》石紙鋏 紙に石紙鋏の絵を描いて見せあい勝負を決める。」

「《遠江》親取り子取り 七、八名の女子の遊びにして、最初にジャンケン（手にてする紙に石に鋏）にて負けし者一人を鬼と称して別となし、（以下略）」

「《駿河》鬼定め すべてこの地方にて遊戯の際、鬼を定むるには多くジャン拳を用うるも、（以下略）」

「《甲斐》ちっちき 「ちっちき」は甲斐地方の鬼定めにて、風呂敷とて掌を開き出すもの、石とて手を握り出すもの、剪刀とて拇指と第二指の二本指のみだすものとの三種にて、各自右手にてその一種を出し、勝敗を決すること、所謂ジャン拳と異なることなし。」

「《甲斐》しね打ち 両児相対し「ちっちき」にて順序を定め（以下略）」

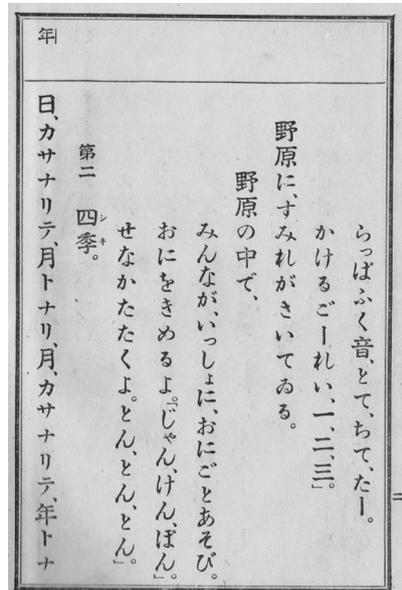
「《甲斐》拳 拳は種類多けれど、多く行つものは「おこん／＼拳」と唱えて、「しゃん／＼／＼、おしゃんしゃんの名主様」或いは「おこん／＼」と呼びつつ拳を出すなり。おこん／＼とはすなわち狐にて、結局化かすとばかさるにて勝敗を決するなり。」

「《伊豆》鬼定め 伊豆にて鬼を定むるには、普通じゃん拳の外に、（以下略）」

「《周防・長門》りゃん拳 二児合い対し、各右の手にて「石」か「鋏」か「風呂敷」を出し、勝負を決するなり。」

これを見ると、じゃんけんという名称は一般的になっているようではあるが、地域によっては呼び名や掛け声が異なることが見てとれる。

文部省の『尋常小学読本 七』（明治三十七（1904）年）には冒頭に『春の遊』という詩が載っており、そこに「おにをきめるよ、じゃん、けん、ぼん。」という言葉がある。この本のために全国的に“じゃんけん”に統一されるようになったという意見もあるが、じゃんけんなどは小学校に入る前、遅くとも低学年で覚えてしまうものである。尋常小学読本の七巻ということは現在の小学校四年生の前期ということになる。この本で統一されるには少し遅いと考える。



【図67 「春の遊」『尋常小学読本七』】

菊池貴一郎（四代目歌川広重、嘉永二（1849）年～大正十四（1925）年）が明治三十八（1905）年に出版した『江戸府内絵本風俗往来』には、

「ぢやん拳 男女とも連れだ立て遊ぶには必ずぢやん拳といふことをなして其役を定む。ぢやん拳は右の手を握りチイリイサイといひながら三度振りて指を開く。五指皆開くを紙とす。母指人さし指の二本を出し余の三指を握るを鉄とす。五指皆握るを石とす。紙は鉄に負け鉄は石に負け石紙に負けるの極めあり。」

とある。非常に細かく、もし当時じゃんけんが誰でも知っているであろう一般的なものであったとしたら、ここまで細かく書くだらうかという疑問が生じる。調査を行った『全国児童遊戯集』を見る限り、実際に使うのは「じゃんけん」という呼称ではないが、一般的には「じゃんけん」というのだ、という認識が明治中期にはおぼろげながらできていた、しかし周知というほどではなかったと言えよう。

こうしてじゃんけんは一人を決める代表的な方法となった。他にも拳は存在していたが、じゃんけんが広まった背景としては、

手先を使うだけなので、体を使う狐拳や虎拳などより行いやすい。

3拍子で行えるため、歌と踊りが必要な所作拳のように時間がかからない。

4すくみや5すくみの拳と比べ、3すくみが最も決めるのに時間がかからず合理的

である。

指を一本しか出さない虫拳に比べ、形が大きいじゃんけんのほうが比較しやすい。ということが挙げられよう。虫拳が広まらなかった原因として、子ども民俗研究家の中田幸平（大正十五（1926）年～）氏は、

「女の子にとって蛇や蛞蝓は気持ちが良いはずはなく嫌なものばかり」<sup>92)</sup> だったから、と述べているが児戯には虫が登場するものはいくつもある。わかりやすさでじゃんけんが勝ったと考える方が自然であろう。

### 3. じゃんけんの語源

じゃんけんという名称や掛け声としての「じゃんけんぼん」などについて、その語源は様々な説が唱えられ正確なところはわかっていない。辞書や書籍に見える語源は次のようなものである。

#### (1) 石拳説

石の読み方はいし、セキ、シャク、コクなどである。じゃんけんは江戸時代から石拳と呼ばれてきた。その石拳がジャク拳となり、それがなまってジャン拳になったという説である。『大言海』は「じゃんけんとは石拳の音がなまったのではないかといわれる」としているが、一方、言語史研究者の杉本つとむ氏（昭和二（1927）年～）は『語源海』（東京書籍、平成十七（2005）年）で「ジャンケンシャッケンを〈石拳〉の訛りとする説もあるが無理。」と書いている。

#### (2) 二（両）拳説

二人で行う拳だから両拳と言い、それがなまったという説。『語源海』で杉本つとむ氏は「〈両拳〉が日本流に訛った言い方」としており、『語源辞典』（講談社、2008）でも「両拳の中国語音リャンケンが変化したものといわれる」となっている。二人で行う拳だから二拳と書き、二は中国語でリャンなのでリャンケンとも考えられるのだが、そういう意見は出ていない。筆者が調べた限り、リャンケンという言葉が書かれた資料は『誹風柳多留 156編』の、

「リャン拳て鉄を出スは花屋の子 花童」

という句のみである。これが両拳か二拳かは不明である。ただリャンケンという言葉がこれしかないというのは少なすぎると考える。

(3) <sup>リャンケンほうい</sup>料簡法意説

「料簡法意」は仏教の用語ということである。“料簡”は仏の教えを丁寧に学び取っていくこと、道理を押し量ること、という意味であり、“法意”は法の意味、という意味である。料簡法意となると「法の意志を料簡する。仏さまの教えをもとによく考えてみるということ。何かを決断するときには、仏さまの教えを羅針盤にして、間違いのない判断をなささいということ」らしい。

もっともらしいが、であれば多数の呼称と掛け声があることが説明できない。じゃんけんほいに似ていることから作られたこじつけ説と考えてよいだろう。

(4) <sup>ヤンケンエンボウ</sup>様拳元宝説

『ながさきことはじめ』（長崎文献社、平成二（1990）年）には

「じゃんけんほい。生まれは中国。様拳元宝と書く。」

とある。『長崎方言集覧』にもあるが両書にはこれがどういう意味かも、どういう経緯で用いられるようになったのかも書いていない。

インターネットで検索をしても様拳元宝という言葉は出て来ず、中国語の辞典や仏教用語辞典を引いても元宝という言葉は出てくるが、様拳や様拳元宝という言葉は出て来ない。前の「料簡法意」同様、じゃんけんほい、という言葉に似ているということで語源にでっち上げられたと言わざるを得ない。

(5) レブチャ語説

グーチョキパーの語源はレブチャ語で、グーはグン（からっぽ）、チョキはジョキ（鋏の両刃）、パーはファ（数字の5）で、ジャンはレブチャ語の「からっぽ」でグーを示し、ケン（アンガミ語の2を示すケンナー）、ポン（アンガミ語の5を意味するポングから来ているという説。医師で歴史家の安田徳太郎（明治三十一（1898）年～昭和五十八（1983）年）氏が『日本の歴史－万葉集の謎』（光文社、昭和三十（1955）年）の中で発表した。

レブチャ語とは辞典で調べると、

「シッキムの最古の住民といわれるレブチャ族の言語。シッキムのほか西ブータン、東ネパール、ダージリンなどでも話される。」<sup>93)</sup>

とある。シッキムはネパールとブータンに挟まれたインドの州である。じゃんけんの言い方は石と紙と鉄であって、当初からグー、チョキ、パーという呼称だったわけではなく、意味も0、2、5ではない。これも似た語を持ってきてこじつけた説と言える。

#### (6) 中国の猜拳(チャイクン)説

中国の拳の一つである猜拳(チャイクン)が、訛ってじゃんけんになった、という説である。猜拳を打つ際の掛け声は猜々々(ツァイツァイツァイ)であり、「じゃんけんぼん」とは大きく異なる。

#### (7) 梵語説

木谷親鸞(生没年不詳)氏の『改めて個人の認識』(時代社、昭和十六(1941)年)の中で展開されている説で下記のように書いている。

「ジャンケンのジャンは日本語ではなく、漢語でもない。禪の梵語から来ているのである。梵語の音訳であつてもと<sup>デヤナ</sup> Dyana 又は<sup>ジャナ</sup> Jana の語音を漢字に訳したもので、意義はともに静慮と解されている。ジャンケンのジャンはこのデヤナ又はジャナを取つたもので、ジャナ拳といふべきを音便の都合でジャンとなつたものである。ジャイ拳といふ地方のあるのも、それはジャナの音便に他ならない。」<sup>94)</sup>

これもまた根拠が書かれておらず、俄かには信用しがたい。日本各地で拳を打つ時の掛け声が異なっている。情報が浸透するようになり、拳の名称がじゃんけんに、掛け声が「じゃんけんぼん」や「じゃんけんほい」に統一されていったがもともとは地域により拳の名前も打つ時の掛け声も違っていた。料簡法意や様拳元宝が元なら、全国的に言い方がこれほど分かれるはずはない。これらの言葉がジャンケンポンに似ていることから生まれた俗説と考えるのが自然であろう。

#### (8) 囃子(三味線)の音説

いくつかの語源辞典を見たが、多くは石拳説と両拳説のどちらか一方が併記であった。筆者もこの2つのどちらかと考えていたが、それでは『皇都午睡』や『巷街贅説』

でとてつる拳がじゃんけんやじゃんじゃか節と呼ばれていることを説明できない。

弘化四（1847）年に芝居の中で演じられたとてつる拳が大流行したことを第5章で述べた。この「酒は拳酒色品は」で始まり、歌と踊りがあって最後に狐拳を打つ遊戯のことは、上演した側は「とてつる拳」と呼んだが、大衆は「じゃんじゃかじゃかじゃけんけん」の個所が印象に残ったのか、この曲を「じゃんじゃか節」と呼び、この拳を「じゃんけん」と呼ぶようになったと考えられる。酒席の拳は歌や踊りが付いて最後に拳を打つが、普通に一人を決める際は長い歌詞は不要であるし、全身を使う酒拳は面倒である。そこでこの歌詞を詰めた「じゃんじゃかじゃかじゃかじゃんけん」や「じゃんけん」だけで拳を打つようになり、結果的に形は手先だけのじゃんけんになり、掛け声は短い「じゃんけん」に落ち着いたと考えられる。呼称は「石拳」「リヤン拳」、掛け声は「チイリイサイ」など多種多様であったが、「じゃんけん」という言葉が一般的な言葉として浸透し、掛け声としては最後の3拍目を強調するために弱い「な」から強い「ほい」や「ばい」に変わっていったのではないだろうか。

#### 4. じゃんけんの呼称と掛け声

じゃんけんの名称と拳を打つ際の掛け声を収集した資料はいくつもある。『方言と土俗』第一巻第三号（昭和四年）の「全国チャンケン呼称集」では「チャンケン、チャンケンホイ、チャンケンポー、チャンケンボー、チャンケンボイ」など135種類をのせている。また第一巻十号では補遺として東京都元八王子村などで採集された「アイショウケン」「ヤンヤンノヤン」など17種を、二巻三号では岩手県で採集した29種、青森県で採集した11種、三巻十号では静岡県で採集した55種を掲載している。雑誌『ほうげん』など、方言関係の書籍ではじゃんけんの呼称を収録したものがいくつもある。

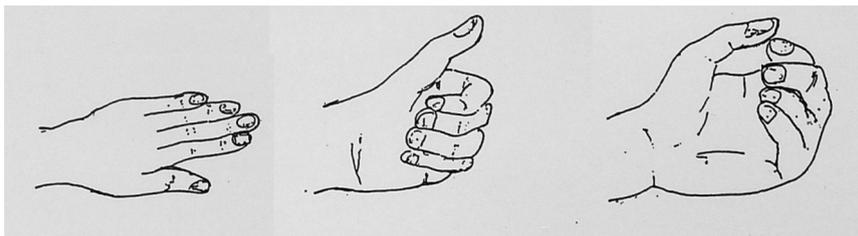
また、各地の方言辞典にも、じゃんけんの言い方は数多く収録されている。例えば『日本方言辞典』では、じゃんけんのこととして「あーだー」（栃木県河内郡）「あばんけべんしょ」（大分県大分郡）「おいもんげっけ」（香川県仲多度郡）、じゃんけんの掛け声として「おーこーりきえっせ」（新潟県上越市）「かみなーりせんこぼーたもち」（静岡県志太郡）「するせんちよす」（長崎県壱岐郡）などを収録している。

『じゃんけんぼん』（赤穂敬也著、1995年）では著者が採集した言葉を載せている。県別に分類し、例えば北海道では「ジャンケンションヨ アイコデションヨ」「ジャン

ケンション」「チーラッセ」「ジャンケン ション アイコデション」「ショ ショ ショ」など8種類を載せ、全国的には296種類を採録している。地域的な分析として、東北では「キッキノキ」「ヤンヤノイン」が随所であり、関東は「チッ」で始まるものが多数あり、名古屋から近畿にかけては「インジャンホイ」が多くあったと述べている。赤穂氏の調査で興味深いのは横浜市の女性から採録した「川<sup>ざる</sup> 笹こえてね」というものである。

「大正末から昭和二年ころ女の子たちの間に“川<sup>ざる</sup> 笹こえてね”というじゃんけんがあったという。(中略)“川<sup>ざる</sup> 笹金魚の目玉が飛び出たよ”の掛け声で同時に拳を出してじゃんけんをした。(中略)川、笹、金魚は川が笹に、笹は金魚に、金魚は川に勝つ三すくみとなっている。」<sup>95)</sup>

そのあとに図が掲載されているが、この拳は“川”と“石”と“鳥”の三すくみで行うマレーシアのオーソンという拳とよく似ている。海外の拳は日本から伝わったものと考えられるが、おそらくはマレーシアの拳も日本のこうした拳が伝わったものであろう。



【図68 川<sup>ざる</sup> 笹こえてね(左から川、金魚、笹)『じゃんけんぼん』】

「じゃんけんとじゃんけん歌」(三原幸久、1991年)では、自分が採集したもののほか、書籍、報告書、個人の連絡などから拾ったもの合計263種を列記している。

『じゃんけん遊び』(2010年)は絵本作家で児童文学者の加古里子(本名 中島哲、昭和二(1926)年～)氏が長い年月をかけて収集した掛け声を収録している。五十音順に掲載しているが、あ”で始まるものだけで「あい きょう ばい」「あいけた」「あいけん ぐー」「あいけん ぐっせ」「あいけん しょ」など約50点、“し”に至っては600弱あるというもので、全部で1227種を掲載している。加古氏は「“あい”で始まるものは本来合拳、すなわちもう一度じゃんけんを繰り返す際のものであった」と推測しているが、それを除いてもおびただしい数である。ただ加古は「軍艦、沈没、破裂」など

のじゃんけんの特別な言い方、「グリコ、パイナップル、チョコレート」や「おちゃらか」などのじゃんけんを用いた遊び、「じゃんけん歌」、二組に分ける時の拳をすべて一緒にしてじゃんけんの言い方としている。厳密にはこれらは区別されるべきであろう。

わらべ歌の一ジャンルとして「じゃんけん歌」がある。拳酒同様、子供の世界にも歌や動作を伴って拳を打つ遊戯は江戸時代から存在したと考えられる。わらべ歌を集めた書籍を見ると「おにきめジャス」(国分寺市)、「ペンヨ、グック、パア」(仙台市)など、いくつもの言い方が記載されている。このほか、インターネットのホームページでも、独自の収集を行っていたり、各地のじゃんけんの言い方を募集していたりするとこゝろが複数見られる。

このようにじゃんけんに対する収集は、古くから多くのものによって行われている。しかし、多くは単純に採集しただけで、地域性や時代性などを考察したものや、分類を行ったものはみかけない。種類が非常に多いものの、地域的には全く離れたところでも、似たようなものがあり、地域性が定義できなかったためと考えられる。

ここでは細かい言い方を記載しないが、特殊な遊び方を除いても、じゃんけんの呼称と掛け声は地域によって異なり、また時代についても近年まで様々なものがあつたことがわかる。数からすれば、同地域同時代でも複数あつたであろうし、その場で自由に変えたものもあつたであろう。すべてがその時代、その地域で統一されていたとは考えにくい。非常に多様な種類を持ち、それが容認されていたし、固定化することは重要ではなかつた。それがじゃんけんの呼称と掛け声の実態であろう。

## 5. 海外のじゃんけん類

海外の拳遊戯については第1章5節で簡単に述べたが、詳細は世界の児戯を集めた書籍などで知ることができる。また昨今はインターネットでも、辞書サイトや個人のブログなどで海外の拳遊戯の情報を知ることができる。そういったものは一概に信用することはできないが参考とすることはできると考え、ここに集めてみた。本章はじゃんけんに関するものであるが、比較のため3すくみ拳以外のものも記してある。なお、石紙鉄もしくはそれに類するものの3すくみ拳の場合、勝敗は日本のじゃんけんと同じなので記載していない。

(1) 東アジアの拳遊戯

①中国

a. 「<sup>ジェンタオスーオプー</sup>剪刀石頭布」「<sup>スーオジェンズプー</sup>石頭剪子布」

発声：<sup>ジェンタオスーオプー</sup>剪刀石頭布、<sup>スーオジェンズプー</sup>石頭剪子布、<sup>ツァイツァイツァイ</sup>猜 猜 猜、<sup>イーアルサン</sup>一 二 三

内容：<sup>スーオ</sup>石頭または<sup>チュイ</sup>錘（<sup>ジェンタオ</sup>金槌、<sup>スーオ</sup>壊すもの）、<sup>ジェンタオ</sup>剪刀（<sup>プー</sup>鋏）、<sup>バオ</sup>布または<sup>バオ</sup>包（<sup>バオ</sup>布、<sup>バオ</sup>包むもの）  
の3すくみ

b. 「<sup>フー</sup>虎棒鳥虫」「<sup>クン</sup>棍打虎、<sup>フー</sup>虎拉鸡、<sup>チ</sup>鸡吃虫、<sup>クン</sup>虫斗棍」

形式：4すくみ

発声：不明

内容：同時に虎棒鳥虫のうちの一つを口で言う。勝負がつかないときはやり直し

言葉	形	意味	強弱
虎	なし	虎	鳥に勝ち、棒に負け
棒	なし	棒	虎に勝ち、虫に負け
鳥	なし	鳥	虫に勝ち、虎に負け
虫	なし	虫	棒に勝ち、鳥に負け

②韓国

名称：カイバイポー

内容：パイ（石）、カイ（鋏）、ポー（布）の3すくみ

③モンゴル

a. ホローダハ

形式：5すくみ

発声：不明

内容：同時に指を一本出す。親指は人差し指に勝ち、人差し指は中指に勝ち、中指は薬指に勝ち、薬指は小指に勝ち、小指は親指に勝つ。それ以外は勝負なし。日本の球磨拳と同じである。

b. デンペー

形式：当てもの拳

## 日本の拳遊戯（下）

発声：不明

内容：指を何本か出すと同時に合計を予想し口で言う。当たれば勝ち。日本の本拳と同じである。

④台湾：中国の拳その1と同じとの報告がある。

### (2) 東南アジアの拳遊戯

#### ①インドネシア

##### a. スィー

形式：3すくみ

発声：「ウン、パン、ピン」「スィー」

言葉	形	意味	強弱
ガチャ	親指	象	人に勝ち、蟻に負け
オラン	人差し指	人	蟻に勝ち、象に負け
スム、スムット	小指	蟻	象に勝ち、人に負け

##### b. ホン、ピン、パ

形式：2 択

発声：ホン、ピン、パ

内容：掌を上向きか下向きに出し、多い方が勝ち

#### ②カンボジア

名称：パウヂンソム

発声：「パウ、シン、シュム」、「ムオイ、ピー、パイ（1, 2, 3）」

内容：ニョーニュー（ハンマー）、コントライ（鋏）、クロダツ（紙）の3すくみ

#### ③シンガポール

##### a. チュムチュムパット

発声：不明

内容：石（握りこぶし）は鳥に勝ち、水に負け。鳥（指を伸ばし先をすぼめる）は水に勝ち、石に負け。水（掌を上）は石に勝ち、鳥に負け。

b. ストーン、シザーズ、ペーパー

発声：シザーズ、ペーパー、ストーン

内容：ストーン（石）、シザーズ（鋏）、ペーパー（紙）の3すくみ

④タイ

a. パオインシュ、パオインチュブ

発声：パオインシュ、パオインチュブ

形式：コーン（ハンマー）、カンクライ（鋏）、クラダート（紙）の3すくみ

b. オーイノーイク

形式：2 択

発声：オーイノーイク

内容：掌を上向きか下向きに出し、多い方が勝ち

⑤フィリピン

名称：「ジャックエンドポイ」「ジャンクエンドポイ」「ピック・パック・パベル、グンティン、バト」

発声：ジャックエンドポイ

内容：バトウ（石）、グンティン（鋏）、パベル（紙）の3すくみ

⑥ブルネイ

名称：オソム

発声：オーソム

内容：バトウ（石）、グンティン（鋏）、パベル（紙）の3すくみ

⑦ベトナム

a. ワントゥーティー

発声：「モツ、ハイ、バー（1, 2, 3）」、「ワントゥーティー（1, 2, 3）」、「ソ  
ン・セン・パオ」、「ボウ・ケウ・パオ」

内容：ダムまたはブア（石）、ケオ（鋏または釘）、ラーまたはパオ（紙）の3すくみ

日本の拳遊戯(下)

※ケオには指1本を出すものもある。

b. その2 (名称不明)

形式：4すくみ

発声：「モッ、ハイ、パー(1, 2, 3)」、「ワントゥーティ(1, 2, 3)」、「ソ  
ン・セン・バオ」、「ボウ・ケウ・バオ」

言葉	形	意味	強弱
不明	指を筒状に丸める	井戸	金槌と鋏に勝ち、ふたに負け
ブア	握りこぶし	金槌	鋏とふたに勝ち、井戸に負け
ケオ	握った手から指を二本出す	鋏	ふたに勝ち、井戸と金槌に負け
バオ	掌を伏せて出す	ふた	井戸に勝ち、金槌と鋏に負け

※ドイツ、フランスと同じものである

c. 「バン、タイ、デン」「バン、タイ、チャン」「セー、バン、タイ」

形式：2択

発声：バンタイデン、バンタイチャン、セーバンタイ

内容：掌を上向きか下向きに出し、多いほうが勝ち

⑧マレーシア

a. その1 (名称不明)

形式：2択

発声：ライリーライリータンブロイ

内容：掌を上向きか下向きに出し、一人だけ違ったら勝ちまたは負け

b. 「オソム」「オーソン」

発声：「オソム」、「サトゥ、ドゥア、ディガ(1, 2, 3)」

内容：バトゥ(石)、グンティン(鋏)、クルタス(紙)の3すくみ

c. 「オーソン」

形式：3すくみ

発声：不明

言葉	形	意味	強弱
パテユ	握りこぶし	石	鳥に勝ち、水に負け
ブルン	握った手から指2本出す	つぼみ、鳥、くちばし	水に勝ち、石に負け
アイール	掌を上	水、川	石に勝ち、鳥に負け

d. その4 (名称不明)

形式：5すくみ

発声：ワン、ツー、ズム

言葉	形	意味	強弱
不明	握りこぶし	石	鳥と板に勝つ、水と銃に負け
不明	指をすばめて伸ばす	鳥	水に勝つ、石と板と銃に負け
不明	掌を上に向けて出す	水	石と銃に勝つ、鳥と板に負け
不明	握り拳から親指と人差し指を伸ばす	銃	石と板と鳥に勝つ、水に負け
不明	掌を下に向けて出す	板	水と鳥に勝ち、石と銃に負け

⑨ミャンマー

名称：ジャーボースエデ

形式：3すくみ

発声：「ポー、ジャー、タアヌア、チャイ タア ゴウ ニヤニヤ ピエ」「無言で  
2回手をたたいて3拍目に下記の形を取る」

言葉	形	意味	強弱
ポー	手を腰に当てる	大将、隊長、指揮官	兵隊に勝ち、虎に負け
タアヌア	銃を構える	兵隊、銃	虎に勝ち、大将に負け
ジャー	手を上	虎、降参	大将に勝ち、兵隊に負け

※日本の狐拳に酷似しており、狐拳が伝わったと考えられる。

⑩ラオス

名称：ティーソム

発声：不明

内容：カンムー（ハンマー）、ミータッ（鉄）、チア（紙）の3すくみ

日本の拳遊戯(下)

(3) 南アジア

①ネパール

a. ネパールの拳その1(名称不明)

形式: 3すくみ

発声: エッグ、ドイ、ティン(1、2、3)

言葉	形	意味	強弱
ガー	親指以外を伸ばす	草	狼に勝ち、羊に負け
シャー	親指と他の4本指の先端を合わせる	狼	羊に勝ち、草に負け
パー	人差指と中指、薬指と小指をつける	羊	草に勝ち、狼に負け

b. ネパールの拳その2

掌の表か裏かの2択の拳がある。

②パキスタン

掌を表か裏かの2択の拳がある。

(4) 西アジア

①イラン

名称: 不明

発声: サング、ケインチ、カーガズ

内容: サング(石)、ケインチ(鉄)、カーガズ(紙)の3すくみ

②トルコ

名称: 不明

発声: キャウト、タシュ、マカス

内容: タシュ(石)、マカス(鉄)、キャウト(紙)の3すくみ

(5) 東欧・北欧

①フィンランド

名称: 不明

発声: 「キヴィ、サクセトゥ、パペリ」、「ウユクシ、カクシ、コルメ(1, 2, 3)」

内容：キヴィ（石）、サクセトゥ（鉄）、パペリ（紙）の3すくみ

②スウェーデン

名称：ステーン、サックス、ポーセ

発声：ステーン、サックス、ポーセ

内容：ステーン（石）、サックス（鉄）、ポーゼ（紙）の3すくみ

③デンマーク

石、紙、鉄の3すくみ

④ロシア

名称：不明

発声：不明

内容：カーミィェニ（石）、ブマーガ（鉄）、ノージュニツウィ（紙）の3すくみ

ポーランド、ユーゴスラビア、チェコ、スロバキアにも石紙鉄の拳がある。

(6) 西欧・南欧

①ドイツ

名称：「シュニック、シュナック、シュノック」「チン、チョン、チャン」「シュタイン、シェーレ、パピエ」

発声：「シュニック、シュナック、シュノック」「チン、チョン、チャン」「シュタイン、シェーレ、パピエ」

内容：シュタイン（石）、シェーレ（鉄）、パピエー（紙）の3すくみ

日本の拳遊戯（下）

b. その2（名称不明）

形式：4 すくみ

発声：不明

言葉	形	意味	強弱
シュタイン	握りこぶし	石	はさみに勝ち、紙と井戸に負け
シェーレ	握った手から指2本出す	はさみ	紙に勝ち、石と井戸に負け
パピエー	掌を上	紙	石と井戸に勝ち、はさみに負け
ブルンネン	親指と4本の指で輪を作る	井戸	石と鉄に勝ち、紙に負け

c. その3（名称不明）

形式：5 すくみ

発声：不明

言葉	形	意味	強弱
シュタイン	握りこぶし	石	鉄と火に勝ち、紙と泉に負け
シェーレ	握った手から指2本出す	鉄	紙と火に勝ち、石と泉に負け
パピエー	掌を上指を上げて出す	紙	石と泉に勝ち、鉄と火に負け
ブルンネン	親指と4本の指で輪を作る	泉	石と鉄に勝ち、紙と火に負け
フォイエール	掌を上にして出し指を上伸ばす	火	紙と泉に勝ち、石と鉄に負け

②フランス

a. その1（名称不明）

発声：ピエール、セイユ、シゾー

内容：ピエール（石）、シゾー（鉄）、フェイユ（紙）の3すくみ

b. その2（名称不明）

形式：4 すくみ

発声：不明

言葉	形	意味	強弱
ピエール	握りこぶし	石	鉄に勝ち、井戸と葉に負け
ピュイ	親指と4本の指で輪を作る	井戸	石と鉄に勝ち、葉に負け
シゾー	握った手から指2本出す	はさみ	紙に勝ち、石と井戸に負け
フェイユ	掌を上指を上げて出す	葉	石と井戸に勝ち、鉄に負け

### ③イタリア

#### a. モーラ<sup>96)</sup>

形式：当てもの

発声：不明

内容：偶数か奇数か先に宣言し、同時に指を一本か二本か出す。合っていれば勝ち。  
出す指の本数が自由という遊び方もある。

b. モーラ 同時に指を何本か出し、合計を口で言う。あっていれば勝ち。

c. モーラ 同時に指を一本か二本か出し、少ないほうが負け。

d. その4 (名称不明)

発声：不明

内容：サツソ (石)、フォルピーチェ (鉄)、カルタ (紙) の3すくみ

### ④スペイン

名称：不明

発声：ウノ、ドス、トレス (1, 2, 3)

内容：ピエドラ (石)、ティヘーラ (鉄)、パペル (紙) の3すくみ

### (6) アフリカ

#### ①エチオピア

名称：ロック (ストーン)、ペーパー、シザーズ

発声：アンドゥ、フレット、ソーストゥ

内容：ハンマー、ドリル、切る道具の3すくみ

#### ②チュニジア

内容：皆でそれぞれ偶数か奇数かを決めて、同時に指を1本から5本選んで出す。そして合計が偶数だったら偶数を選んだ人の勝ち。奇数だったら奇数を選んだ人の勝ち。

## 日本の拳遊戯（下）

### ③その他

南アフリカ共和国 「チャン、チュン、チョン」という拳があるようだ。内容は不明。

エジプト 掌を表か裏にして出す。

セネガル フランス語で3すくみ（石紙鉄）

ジンバブエ 英語で3すくみ（石紙鉄）。掛け声は「ワンツースリー」。

モーリタニア 英語で3すくみ（石紙鉄）。

タンザニア、ケニア じゃんけんはないとの報告あり。

### (7) 南米・北米

#### ①アメリカ

名称：ロック（ストーン）、ペーパー、シザーズ

発声：ワン、ツー、スリー（1, 2, 3）

内容：ロック（石）、シザーズ（鉄）、ペーパー（紙）の3すくみ

#### ②メキシコ

ウノ、ドス、トレス（1, 2, 3）で打つ拳がある。

#### ③ブラジル

名称：「パール、オウ、インパール」「パー、インパー」（偶数が奇数かの意味）

形式：2択

発声：「パール、オウ、インパール」「ドイス、オウ、ウン（2か1か）」「ジャー」

内容：勝負の前に参加者が「Par（偶数）かImpar（奇数）か」申告し、掛け声  
で、人差し指と親指を出すか人差し指のみを出す。合計が言ったものと合っ  
ていれば勝ち。

言葉	形	意味	強弱
パール		偶数	当てれば勝ち
インパール		奇数	〳

④その他

アルゼンチン スペイン語で3すくみ(石紙鉄)がある。

チリ 「カーチブン」の掛け声でスペイン語の3すくみがある。

(8) その他

①ロック、ペーパー、シザーズ

英語であるが無国籍と言ってよいだろう。カナダには国際じゃんけん協会 (International Rock paper scissors society) なる組織があり、毎年世界大会を開いていた。協会のウェブサイトでは大会は2010年まで記録されているが、それ以降の活動記録はない。



【図69 World RPS Society のウェブサイト (http://www.worldrps.com/)】

日本の拳遊戯（下）

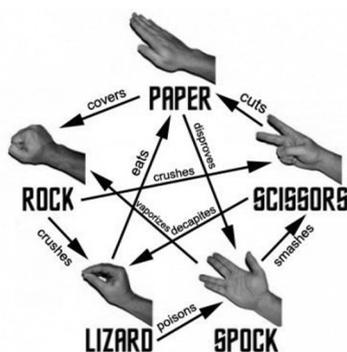
②ロック、ペーパー、シザーズ、リザード、スポック

名称：ロック、ペーパー、シザーズ、リザード、スポック

形式：5 ずくみ

発声：不明

言葉	形	意味	強弱
ロック	握り拳	石	鋏とトカゲに勝ち、紙とスポックに負け
ペーパー	指をすべて伸ばす	紙	石とスポックに勝ち、鋏とトカゲに負け
シザーズ	拳から指を 2 本伸ばす	鋏	トカゲと紙に勝ち、石とスポックに負け
リザード	親指と他の 4 本の指先を付け トカゲの顔を作る	トカゲ	紙とスポックに勝ち、石と鋏に負け
スポック	指を伸ばし人差指と中指を付 け、薬指と小指を付ける。	スポック <sup>97)</sup>	鋏と石に勝ち、トカゲと紙に負け



【図70 ロック・ペーパー・シザーズ・リザード・スポック（graphjam.com より）】

3 ずくみ拳が各国にあること、ほとんどが石、紙、鋏かそれに似たものであることがわかる。アジアに多いことや、日本と関係の深い国に多いことから日本から伝播したと見解がある。各国の古い遊戯を調査しきれていないが、昔はなかったことを証明できれば、日本から広まったことの強力な証拠となるだろう。

6. 海外から見た日本のじゃんけん

現在、じゃんけんは多くの国々に存在するが、多くはアジアであり、また各国で普及したのはここ数十年である。明治期に日本に滞在した外国人が日本の風俗を記録しているが、いずれもじゃんけんは日本の特徴ある遊戯としている。じゃんけんの発祥は日本であると言い切って良いのではないだろうか。

明治四（1871）年から明治八（1875）年まで日本に滞在したアメリカ人教師のウィリアム・E・グリフィスが日本を紹介した『The Mikado's Empire』に拳の記述があることは本章の冒頭で記したが、他にも日本の拳について書かれた記述がある。

#### (1) エドワード・モース

明治十（1877）年から明治十二（1879）年まで3回日本に滞在したアメリカの動物学者、エドワード・S・モース（Edward S Morse, 1838～1925）が日本で見聞したことを書いた『Japan Day by Day』（1917）には、

「An interesting game is played with the hand. Kneeling opposite each other the right hand of each player is flung out at the same instant. The hands must be in one of three positions: the palm open, representing paper; the index and middle finger open, suggesting a pair of scissors; the hand clenched, representing a stone. Now the paper can cover or conceal the stone; the stone can smash the scissors; and the scissors can cut the paper. Counting "one, two, three," the player fling their arms at the same time, and on the third stroke the hand must come in one of the three positions mentioned above. If your opponent comes out scissors and you come out paper, he has beaten you once, for scissors can cut the paper; If, however, you had come out stone, the stone can smash the scissors, and you have won. Either one winning three times in succession has won the game. You will notice little children when called upon to do an errand resort to this game, doing it once only, to see who shall go; drawing lots, in fact.」

（「腕を使ってやる面白い勝負がある。二人むかい合って坐り、同時に右腕をつき出す。手は掌をひろげて紙を表す形と、人さし指と中指とを延して鋏を表す形と、手を握って石を表す形の、三つの中の一つでなくてはならぬ。さて、紙は石を包み、あるいはかくすことが出来、石は鋏をこわすことが出来、鋏は紙を切ることが出来る。で、「一、二、三」と勘定して同時に腕を打ち振り、三度目に、手は上述した三つの形の中の、一つの形をとらねばならぬ。対手が鋏、こちらが紙と出ると、鋏は紙を切るから、対手が一回勝ったことになる。然しこちらが石を出したとすれば、石は鋏を打ちこわすから、こちらの勝である。続けて三度勝った方が、この勝負の優勝者である。小さな子供達が用をいいつけられた時、誰が行くかをきめるのに、この勝負をす

るのを見ることがある。この時は、只一度やる丈だから、つまり籤を抽くようなものである。」<sup>98)</sup>

とある。じゃんけんの仕組みを事細かに説明している。もしアメリカに3すくみの拳遊戯があったのならこれほど詳しい解説は必要ないはずである。明らかにモースはじゃんけんを知らなかったし、アメリカには拳遊戯が存在しなかったと言ってよいだろう。また、『Japan Day by Day』には、二か所に狐拳や藤八拳の記述がある。モースが『Japan Day by Day』を執筆したのは1913年であるが、1883年に日本を去った後に東南アジア、フランス、イギリスを回っている。その関連の記述もないことから、それらの国々にも拳遊戯がなかった可能性は高いといえるだろう。

## (2) スチュワート・キューリン

アメリカの民俗学者、スチュワート・キューリン (Stewart Culin, 1858 ~ 1929) の著書『Korean Games』(1895年)には、「Hand clapping game (手をたたく遊び)」の章に、日本の拳遊戯が数種類記載されている。その中の一つが「石拳、別名、じゃんけん」である。解説は次のようなものである。

「One of the commonest of these games is *Ishi Ken*, or "Stone ken" usually called *Janken*. In *Ishi Ken* the fist is called *ishi*, "stone;" the open hand, *kami*, "paper," and the extended index finger and thumb, "*hasami*," scissors." The players extend their hands simultaneously. Stone beats scissors, as scissors will not cut stone. Paper beats stone, as paper will wrap up stone, and scissors beat paper, as scissors cut paper. *Janken* is often used to decide who shall perform some duty or task. Thus, jinrikisha men play it to determine which is entitled to a passenger. In this case it is customary to cry "one, two, three," which is uttered as a thrice-repeated hissing sound before each decisive movement of the hand.」(これらの遊戯の中で最も一般的なのがイシケンつまり石の拳で通常じゃんけんと呼ばれている。石拳では握りこぶしを"石"と呼び、指を開いたものを"紙"、親指と人差し指を開いたものを"鉄"と呼ぶ。競技者は同時に手を出す。石と鉄では、鉄は石を切れないので石の勝ちである。紙と石では紙は石を包むので紙の勝ち、紙と鉄では、鉄は紙を切る所以鉄の勝ちである。じゃんけんはしばしば何らかの仕事や務めをする者を決めるために行われる。例えば人力車夫は誰が客を乗

せるか決めるために行う。こういう場合、通常は「いち、に、さん」と齒擦音3回のかけ声をかけて行われる。(拙訳))

キューリンもグリフィスやモース同様、じゃんけんを詳細に説明している。この他に虫拳や狐拳、藤八拳、薩摩拳などを解説している。同じ章には中国の遊戯も書かれているが、それは

「The two players sit opposite to each other. First they clap their hands. Then they clap each other's right hands and clap their hands. Then they clap each other's left hands and clap their hands. These motions are continued alternatively, faster and faster, until one makes a miss.」(2人が向かい合い、まず自分の手を叩き、次に自分と相手の右手を打ち合わせ、次に自分と相手の左手を打ち合わせる。だんだん早くしていき、間違えたほうが負け(拙訳))

というもので、これは手を叩く遊戯であるが瞬時に勝ち負けを決める拳遊戯とは言い難い。そのあとにキューリンは、

「Chinese counterparts also exist of the Japanese games, such as Ishi and Kitsune Ken, as will be seen from the following account given by Miss Adele M. Fielde.」  
(日本の石拳や狐拳といった拳遊戯の中国版も存在する。次のようなアデル・フィールドの記述がある。(拙訳))

と解説している。キューリンが引用したフィールドの文は次に述べる。

### (3) アデル・フィールド

アデル・フィールド(Adel Marion Fielde, 1839~1916年)は、アメリカの社会活動家、バプティスト宣教師、科学者、作家で中国に十数年滞在し、彼女の著作である『A Corner of Cathay』はさまざまな中国の風俗について書かれている。その中の「中国の子供の遊び」の章には次のようなくだりがあり、これをキューリンは引用している。

「The children stand in pairs, and each suddenly thrusts out an arm with one digit extended horn the closed fist. One or the other in each pair is vanquished if he holds out a finger reckoned to be of lesser power than the one extended by his neighbor. The thumb is counted as the local idol the forefinger as a fowl, the middle finger as a gun, the ring-finger as a fox the little finger as a white ant. If the thumb be opposed to a forefinger the thumb vanquishes, because fowls are com-

## 日本の拳遊戯（下）

monly slain as offerings to idols. If a thumb be opposed to a middle finger the thumb vanquishes, because a god is greater than the gun, which is often used to announce the presence of the gods. If a thumb be opposed to a ring finger, there is neither a victory nor a defeat, because gods and foxes are supposed to be always on friendly terms, and so there must be another trial. If a thumb be opposed to a little finger the thumb is vanquished, because white ants often devour idols. If a forefinger be opposed to a middle finger the latter is victor, because guns destroy fowls. If a forefinger be opposed to a ring-finger the former is conquered, because foxes eat fowls. If a forefinger be opposed to a little finger the latter opposed is defeated, because fowls eat white ants. If a middle finger be opposed to a ring-finger the latter is defeated, because guns kill foxes. If a middle finger be opposed to a little finger there must be another trial, because guns and white ants have no mutual influence. If a ring-finger be opposed to a little finger the same result follows, because foxes and white ants have no known relation to each other for either good or ill.」（子供たちは立って対になり、互いに握った手から指を一本突き出す。相手より弱いとされる指を出した者が負けである。親指は偶像を、人差し指は鳥を、中指は銃を、薬指は狐を、小指は白アリを表す。親指と人差し指では、鳥は偶像の生鬣にされるので親指の勝ち、親指と中指では神は銃より偉大なので親指の勝ち、親指と薬指では偶像と狐は共に神の化身なので勝負なし、親指と小指では白アリが偶像を食い荒らすので小指の勝ちである。人差し指と中指では、銃が鳥を撃つので中指の勝ち、人差し指と薬中指では、狐が鳥を食べるので薬指の勝ち、人差し指と小指では鳥が白アリを食べるので人差し指の勝ちである。中指と薬指では銃が狐を打つので中指の勝ち、中指と小指では銃と白蟻は勝負にならないので引き分けである。薬指と小指も、狐と白蟻は勝負をしないので引き分けである。（拙訳）

指と指による拳遊戯だが、強弱が平等な 5 すくみ拳とはなっていない。キューリンには石拳や狐拳と同じように思えたのであろうが、日本の、厳密に有利不利の無いすくみ拳とは性質が異なる単なる児戯である。ちなみにこの「中国の子供の遊び」の章には他に拳の遊戯の記載はない。

キューリンの本では、日本の拳遊戯が「手を叩く遊び」の中に含まれている。もし、朝鮮や中国に拳遊戯があれば、それでまとめて一つの章としたと考えられる。「手を叩

く遊び」の中に入れたのは、それが数少ない遊びであったからであろうし、欧米になかったため、もしくはキューリンが知らなかったため「手を叩く遊び」の中に入れてしまったのであろう。

「手を叩く遊び」の次の章では、握ったものを当てる遊びを挙げており、ここでは朝鮮と日本と中国の遊びを解説している。日本の遊びは当てもの拳の一つである「なんこ」である。キューリンは中国・朝鮮・日本三ヶ国だけでなく他にもアジアの遊戯を細かく掲載しており、もし同様の遊戯が中国や朝鮮半島あるいは他の国にあれば、その旨の記載があるはずで、そこにはない以上、この調査の時点では当てもの拳は存在していたが、じゃんけんなどのすくみ拳は日本周辺の国々に無かったことを示すものである。

キューリン、グリフィス、モース、フィールドの文を読む限り、いずれもじゃんけんなどの拳遊びを珍しいものとして、その仕組みをていねいに記述している。もしこの時点で彼らの母国に同様の遊びがあればそのような記述をするはずであり、それがいないことは拳遊びがなかったことを示すものである。それがいない以上、じゃんけんには代表されるすくみ拳は日本発祥の遊戯と言い切って良いと考える。

## 7. ゲームの際の親の決め方

### (1) 伝統的なゲームでの親の決め方

日常の中でじゃんけんを行う場面は少なくないが、実際に、こういうときはじゃんけんを行えと明記しているものは少ない。じゃんけんを行うことを明記しているものとして、市販のゲームで最初のプレイヤーを決める方法がある。ルールに記載されているわけだが、日本の場合は多くは「じゃんけんなどで」あるいは「じゃんけんなど適当な方法で」とあり、じゃんけんが最も適当な方法であることがうたわれている。

海外の伝統的なゲームでは、主に次のような方法が用いられる。まず、トランプに代表されるカードゲームでは、カードをよく切って伏せ、机の上に広げる。全員1枚ずつ引いて見せ、大きい札・強い札を引いた者が最初のプレイヤーとなる。通常、A, K, Q, J, 10, 9, 8…4, 3, 2の順である。最大が複数いた場合は、その者だけでさらにカードを引き、異なる数を引くまで続ける。

さいころを用いるゲームの場合、全員が1回ずつ振り、最も大きい数を出した者が最初にプレイを行う。最大が複数いた場合は、その者だけでさらにさいころを振り、異なる目を出すまで続ける。

## 日本の拳遊戯(下)

さいころを用いない場合は、何らかの方法が必要となる。将棋では振り駒という決め方があり、囲碁では握りという決め方がある。チェスでは一方のプレイヤーが両手に白と黒の駒を1個ずつ相手に見えないように握り、もう一方のプレイヤーがどちらかの手を選んで決定する。2人用のゲームや2チームによる対戦の場合は、スポーツの先攻後攻を決める方法として使われているコイントスがある。これは2組の場合は問題ないが、複数いる場合は使うことができない。もちろん、何でも行えば可能だが、それはスマートではない。さいころやカードを使うゲームでは、それを用いれば良く、多くのゲームはこれで行われていると考えられる。またそういうものの無い場合だが、決まり文句を行っていく方法がある。日本であれば「だれにしようかな、かみさまのいうとおり」などの言葉を言いながら順に指していく方法だが、これも正確には平等とは言い難い。

### (2) 近年の市販ゲームでの親の決め方

その他の複数人数で行われるゲームの場合はどうだろうか。もし、じゃんけんが一般的ならば、そのような記載があるはずである。実際、日本国内で販売されている日本製のゲームを調べてみると、大半が「じゃんけん」あるいは「じゃんけんなどの適当な方法で」という記述であった。では海外のゲームはどうだろうか。そこで1980年代から近年までの海外での市販のボードゲーム・カードゲーム、約500点強について、原文のルールからゲーム開始時の先頭プレイヤーの決め方を調査してみた。結果は以下の通りである。なお、ゲーム名は日本発売時の名称または原題の直訳である。

1. 決め方の記載があり、平等でないもの ..... 172点(33.1%)
2. 順序を決めるという記載はあるが、決め方の記載がないもの  
..... 146点(28.1%)
3. 決め方の記載があり、平等であるもの ..... 85点(16.3%)
4. 順序を決める記載がないもの ..... 44点(8.5%)
5. 決め方の記載があるが、独特のもの ..... 72点(13.9%)

#### ①決め方の記載があるが、平等と言えないもの

172点の内訳は以下の通りである。

- a. もっとも年の若い人から ..... 118点

- b . もっとも年長の人から ..... 51点
- c . もっとも誕生日の早い人から ..... 1点
- d . その他 ..... 2点

「年の若い者から」だけで118点と22.7%もあり、全体の5分の1である。「もっとも若い人」は、年少者はゲームの実力が低いと考えれば、少しでも有利な（もちろんゲームの内容によって手番が早いほうが有利とは限らないが）位置にしてあげようという配慮かもしれない。しかし、中高生以上であれば、頭脳の程度はほぼ同じであり、若いから弱いということにはならない。c のもっとも誕生日の早い人は年月日で考えれば a と同じだが、年を別にすればあまり意味はないだろう。b は年長者の特権と考えれば理解できなくもない。これらは一人を決める方法として良く記載されているものであるが、メンバーが同じであれば常に同じ者が最初ということになり、明らかに不平等と言える。最も多いものが不平等というのは不思議な感じもするが、このようなゲームは娯楽であり、必死になって勝敗を争うものではない、という考え方が根付いているためであろう。

②順序を決めるという記載はあるが、決め方の記載がないもの

146件だが、日本のゲームにも見られるもので、プレイヤー側で適当な方法で決めれば良いということで特に記載がないのである。普段ゲームをするしないにかかわらず、一般的な人間ならば大勢から一人を決める方法は知っているという前提であろう。日本人なら、じゃんけんであろうし、海外ではダイスやカード等を用いることを想定していると考えられる。じゃんけんも想定しているかもしれないがとにかくその場のメンバーに任せてあるということである。記載がないからどうやって決めてよいかわからない、という苦情はないと考えられる。

③決め方の記載があり平等であるもの

85点の内訳は以下の通りである。

- a . 全員さいころを振り、最も大きい（小さい）目を出した人 ..... 52点
- b . カードを引き、最も大きい（小さい）数を引いた人 ..... 8点
- c . その他（平等） ..... 12点
- d . その他（戦略的） ..... 13点

## 日本の拳遊戯（下）

その他としては「順番にダイスを2個振り、最初にゾロ目を出した人」（「チェック・ザ・リップー」）、「袋の中を見ずに宝石を1個ずつ取り、黄色の宝石を取った人」（「銀のドワーフ」）など、いずれも偶然の要素で決まるものである。戦略的とあるのは、「全員数字の書かれたカードを伏せて出し、最も大きい数のカードを出した人」（「プール・ポジション」）というように、各自の判断で最初にプレイする権利を競うものである。全員にチャンスがあるわけで、ある意味平等と言ってよいだろう。さいころやカードが入っているゲームでは当然のような決め方だが、実のところ16.3%と6分の1でしかなかった。

### ④ 順序を決める記載がないもの

「決める」という記載がないものが44点と一割近く見られた。これもプレイヤーに任せたとのことだろう。順番にプレイを行うのであるから開始時に順番を決めるのは当然であるし、何らかの方法で決めないと始められない。普通の人間なら方法は知っているはずで、記載する必要はないということであろう。前例に従えば、さいころが入っているゲームであれば、サイコロを振って、数字の書かれたカードが人数以上の種類あるゲームではカードを1枚ずつめくって、という方法が使われるものと考えられる。

### ⑤ 記載はあるが、そのゲーム独特なもの

172件はそのゲーム独自の方法が記載されているものである。決める方法は書かれているのだが、さいころやカードといった一般的なものでもなく、かといって「一番若い者」というなんとなく理由がわかりそうなものでもない特殊な方法が書かれているものである。そのうち約6割は下記のように決めようと思えば一人に決められる（と思われる）指示になっている。

「塗りたくれ」：最もカラフルな服を着ている人

「ヴィゴ」：現在、財布の中身の最も少ない人

「ケオプス」：一番毛の長い人

「キングルイ」：最も最近料理を作った人

「シュティムト・ゾウ」：最も最近エマおばさんの店<sup>99)</sup>で買い物をした人

「金庫破り」：もっとも本物の紙幣を素早く振り回した人、または溶接用工具を持ちこんだ人

「ショッテン・トッテン」：普段持ち歩いているカバンの中のお金の少ない人  
「ピーナッツ」：もっとも小銭を多く持っている人  
「宝石の首飾り」：もっとも多くの装飾品を身に着けている人  
「Z」：27.5×113.2を一番早く計算した人  
「ひつじ牧場」：もっとも最近田舎に行った人  
「エム」：自分の名前にMの文字が最も多く使われている人  
「パンダ・ゴリラ」：もっとも最近動物園に行った人  
「王への請願」：もっとも最近城に行った人  
「ギャングスター」：もっともよくゴッドファーザーを見ている人  
「脱獄囚」：もっともたくさんペットを飼ったことがある人  
「フォーセール」：もっとも小さい家に住んでいる人  
「アトランティックスター」：もっとも最近船で旅行をした人  
「アバロン」：最近イギリスに行った人  
「80日間世界一周」「ポートベローマーケット」：いちばん最近ロンドンに行った人  
「稲妻と雷鳴」：いちばん最近ギリシアに行った人  
「チロス」：もっとも最近地中海を訪れた人  
「アムステルダムの人」：もっともよくアムステルダムに行っている人  
「エルパソ」：最近銀行に行った人  
「マナーリザ」：最近展覧会に行った人  
「ミステリー・オン・ザ・ナイル」：もっとも最近休暇から戻ってきた人  
「カントリーライフ」：最近トマトを食べた人  
「すしゾック」：もっとも最近魚を食べた人  
「シャングリラの橋」：一番最近、くるみで表面加工したエベレスト山のセコイア製の青と白のチェック模様の竹馬に乗った人  
「ノーチラス」「リフ」：もっとも長く水の中で息を止めていられる人  
「ニューイングランド」：家系がもっとも長い人  
「ビバ・ビーバー」：門歯がもっとも長い人  
「バンパイア」「バンパイアの夜」：犬歯がもっとも長い人  
「エイのヨッヘン」：もっとも指の太い人  
「ジャマール」：もっとも指の短い人

日本の拳遊戯（下）

「ひつじパニック」：もっとも髪の毛の長い人

「ホブラディ・ホブラダ」：もっとも耳の長い人

「ロスマンフォス」：もっともラクダの真似が上手い人

「白蓮」：最も白髪が多い人

「遺跡探検」：もっとも高価なアクセサリーを身に着けている人

「ウィリー」：Willi という名前の人がいたらその人

大半はゲームの内容に関係のある事柄である。この方法で決められないことはないが冗談と受け止めるのが正しい対応だろう。

残り 4 割は人によって感覚が異なり、まず一人には絞れないと思われるような記述がされているものである。

「ぐっすりおやすみ」「いい夢見てね」：いちばん眠い人

「コアラ」：もっともコアラに似ている人

「ラッキーファイブ」：今日もっともついている人

「石器時代」：もっとも汚らしい人

「トップバナナ」：もっとも猿のものまねがうまい人

「トンガボンガ」：もっとも海が好きな人

「エレメンツ」：もっとも体の大きい人

「アパッチ」：もっともシャープな目をした人

「カイ・ピラニア」「ソレ・ミーヨ」「マンマ・ミーア」「グログロ」：もっとも空腹の人

「ピック・ア・ディリー」：もっとも大きな声で鶏の鳴きまねをする人

「エレファント」：もっとも不器用な人

「原始の生活」：もっとも毛深い人

「デッカイ A とチッチャイ a」：いつもゲームに負けてばかりいる人

「シックス」：もっとも時間のない人

「ジャスト・フォー・ファン」：もっとも陽気な人

「手荷物検査」：もっとも誠実な人が保安官となり、その左側の人

「バルーンカップ」：気球に乗ったことのある人

「フラワーパワー」：鮮やかな色の服を着ている人

「ブルームーンシティー」：もっとも礼儀正しい人

「ブルゲンランド」：名前が古風な人

「アルタミラ」：もっとも野性的な人

「ゴールドブロイ」：もっともものどの乾いている人

「サラマンカ」：もっとも大きい声でオレと叫ぶことのできる人

「シチリアノス」：もっともスパゲティをうまく作ることのできる人

いずれもゲームの内容に関連のある項目であるが、ものによっては決めようのないものや複雑なものがあり、これらのゲームをしようというものがまじめにこれに従って決めるとは思えない。筆者は欧米のゲームを何点か翻訳したが、その際こういった表記のものについては半ばジョークであると考え日本語版のルールには「じゃんけん等の適当な方法で」と記載した。欧米では実際にどのように行われているのかわからないが、娯楽として行われている場合はこのような方法でも全く構わないだろうし、また、この通りでなくさいころやカードで決められていることもあると考えられる。これらの内容のほとんどはゲームの題材と結び付けられているものが多く一種のジョークと考えて良いだろう。もちろんこれに従っても問題ないと思われるが、本気で決めようと思ったらプレイヤー間で意見が食い違ったりして決まらないこともあるはずである。一部のゲームは真剣に勝敗を争うもので、またそうでなくても順番が勝敗に大いに影響する（と知っている人がいる）場合、このような理論的でない決め方に異議を唱える者もいると思うが、多くの場合ゲームは娯楽であり、ルールブックについてもこの部分で笑いを取り、場を和やかにすることを目的として書かれていると考えられる。

これらの中に、じゃんけんやそれに類した方法で一人を決める方法を記載しているものは一つもなかった。ランダムに決めるものはさいころやカードなどを用いて決めることができる。その他の場合だが、年齢やこじつけのような方法で一人を決めよとあり、これらは苦し紛れだが、なんとか一人を決めようとしていると考えられる。じゃんけんのように道具を用いずに一人を決める方法が周知であればそれを記載すればよいはずである。したがって欧米ではじゃんけんが一般的でないと言えよう。

## 8. じゃんけんのまとめ

じゃんけんは現在拳の総称的に用いられているが実際は拳遊戯の一つでしかない。拳遊戯は当てもの、三すくみ、対応に分類できるというのが筆者の見解だが、現在行なわれている拳は圧倒的に三すくみが多く、その中ではじゃんけんがほとんどである。つま

り、現在、拳遊戯＝じゃんけんという状態である。

三すくみ拳は日本で江戸時代に生まれたと考えられる。じゃんけんはその中の一つだが、もっともシンプルでわかりやすいことから幕末もしくは明治初期に急速に広まり遊びや決めごとに用いられたと考えられる。

じゃんけんの呼称はおびただしい数存在する。これはじゃんけんの要点が石か紙か鉄のいずれかを示すことであって、呼称や掛け声はどうでも良かったということであろう。つまり、全員が同時に手を出し、その手はグーかチョキかパーのいずれかであり、勝敗の基準を全員がわかっていれば良いのである。その統一さえ取れていれば、呼称などはなくても良いのである。したがって、良い加減に名前を付けたり、適当に言ったりしても一向に構わず、掛け声のほうも全員が同時に揃えられれば三拍子でなくてもなんでもかまわない。このため様々な名称があったが、さらに変わったものができ、時代の流行を取り入れたりして千変万化していったわけであろう。あまりにも変化形が大きすぎ元々がなんであったかもわからなくなってしまっているのである。それが情報網の発達により、統一化の方へ向かい、名称は「じゃんけん」に落ち着いたようだが掛け声のほうはまだ一つには定まっていないうのである。

現在のじゃんけんは世界各国に見られる。アジア中心で中国発祥ということが一部の間では認知されているものの大多数の人間はわかっていない。中国にあったのは当てもの拳であり、すくみ拳は日本で生まれたと考えられる。短い期間に広まったのはじゃんけん自身のシンプルさわかりやすさと合理性にあると考えられる。そう遠くないうちに全世界に広まるだろう。カナダに協会があるようだが、そのうちどこから始まったのが全くわからなくなってしまうのではないかと思われる。本稿により日本発祥ということが広く認知されることを望みたい。

## 第8章 対応の拳

対応の拳は、一方の行為や発言に対し、もう一方の競技者が対応することで進行していく遊戯である。問答の拳と呼んでも良いだろう。

## 1. 江戸期の対応の拳

江戸期の対応の拳の史料はかなり少ない。寛政年間に書かれた『絵本大人遊』と『絵本続大人遊』は様々な遊びを集めた絵本で、多くは酒の席での他愛もない遊びである。全部で二百ほどの遊戯を紹介しているが、その中に拳と名のつく遊戯は以下の三種類で、いずれも対応の拳である。

「答礼拳」 『二人むかひ合て、あいさつをするなり。どちらにても、左様でござりますといふたるもの負なり。互に、左様でござりまするをいふべき言葉をもうけて、あいさつしかけるなり。』

互いに言葉を交わし、先に「そうですね」と、返答してしまった方が負けとなる。相手が「そうですね」と答えそうなことを言うのである。

「聾拳」 『是も二人あいさつをする也。とんとつかぬことども両方よりいふ也。たとへば、けふはけしからぬ能日和でござる、といふに、されば馬のかほは長いものでござる、というよふに、とんときたるをよしとす。能ひよりでござる、といふたるに、きつい風がふきました、など、つきたるをきろふ。』

これも答礼拳と同様だが、全く関係のないことを言わなければならない。相手の言ったことに関連する答えをしてしまうと負けとなる。

「唐山拳」 『是は、両方より唐人ことばのてたらめを、とつかけ／＼手を出していふ。おしつよく、いゝかちたるものをよしとす。』

外国人が話しているように、訳のわからないことをとにかく強く言い、会話をしてい



【図71 唐山拳『絵本続大人遊』】

るように言いあう。言葉に詰まった方が負けとなる。

ちなみに『絵本続大人遊』を活字で収録している『日本庶民文化史料集成 第九巻』ではこの唐山拳には“もう（たう）しんけん”とルビがふられている。校注者は、唐という字に振られている仮名は「もう」だが、この字を「もう」と読むとは考えにくいので「もう」は「たう」を書き誤ったと判断したと思われる。唐山拳という表記は3回登場するが、一つはふりがながなく、一つは「とうしんけん」、もう一つは「もうしんけん」と読める。説明では唐人ことばのでたらめを言い合うので唐は「とう」と読むと考えるのが妥当だろう。「山」を「しん」と読むのも奇異だが、3回とも「唐山拳」と表記されており「唐人拳」の誤りではないようである。

『絵本大人遊』『絵本続大人遊』には合わせて百近い遊びが載っているが、多くは力比べや鬼ごっこ的な他愛もないものばかりである。問答の拳は3点しかなく大人の遊びの中で大きな位置を占めていなかったと考えられる。しかし『絵本大人遊』は題名の通り絵本であり、言語の遊戯は絵にしにくいためにわずかしき取り上げられなかった可能性がある。多くの名もない単純遊戯として他にも多数存在していたかもしれない。収録の遊戯はみな単純なものでいつ始まったのかもわからなければ、いつ流行したとか、いつ行われたとかも不明のものである。問答の拳などもそういったもので、いつからあったものなのか判断するのは非常に難しい。

## 2. 明治以降の対応の拳

明治に入ると、遊戯や遊芸の本が多数出版されている。その中に拳の遊戯の記載は多い。対応の拳は場合、拳と言う名称のついていないものも多い。実際に対応の拳は手を使わないものも多く、会話だけで行うものや、全身を使うものもある。拳=手という定義からは外れていると言える。勝敗を決める遊戯の中で拳が代表的なものとなったために、遊戯だから「○○拳」という名称を付けたものと言えよう。書籍から対応の拳・問答の拳を列挙してみる。なお三府拳と商売拳は第2章で紹介したので省略する。

### ・「お上げのお手を」

狐拳を打ち、勝った方は、例えば相手が狐を出していたら、「お上げのお手を、ちょいとお突き。」「お上げのお手を、ちょいとお下げ。」などと言う。負けた方はそれに合わせて狐拳を打ち、「ちょいとお突き。」と言われたときに鉄砲を出したり、

「ちょいとお下げ。」と言われたときに庄屋を出したりすると、つまり、言われたものを出してしまうと負けになる。

- ・「相談拳」

二人で行う問答の拳。一方が質問をし、もう一方はその返事をしてはならず、まったく関係のないことを答えなければならない。答えたら逆に質問を返し、続けて行く。鬻拳（つんぼけん）、唐人拳（とうじんけん）と同様の遊び。

- ・「あめりか拳」

一人が先生、他の者は生徒となる。生徒は先生のすることや言うことを真似しなければならない。笑った者が負けとなる遊びである。

- ・「大将拳」

複数で行う問答の拳。一人が大将となって面白いことを言ったり、動作をしたりし、残り全員が兵卒となって同じように行く。笑ってしまったたりしてうまく真似ができなかった者から抜けていく。

- ・「医者役者芸者」

二人で行う言葉と動作の拳。一人が医者、役者、芸者のうちどれか一つを言う。もう一方は素早く、今言われなかった形をする。言われた形をしてしまうと負け。医者は脈を取る形、役者は見栄を切る形、芸者は三味線を弾く形をする。

- ・「とりもちみもちやりもち取餅身持槍持」

二人で行う言葉と動作の拳。一人が取り持ち、身持ち、槍持ちのうちどれか一つを言う。もう一方は素早く、今言われなかった形をする。言われた形をしてしまうと負け。明治時代の酒席の遊戯の本に記載があるが、どのような形をするのかの記述が無い。

- ・「停車場拳」

数人で輪になって行う。各人に停車場、つまり駅の名前を付ける。順番になった者は、指である者を指し、口ではその者に付けられた停車場名でない停車場名を言う。次は言われた停車場名を持つ者の番になるが、その者が黙っていたり、他の者が口をきいてしまったりして間違えると負けになる。昨今もレクリエーションゲームの本などには、これに該当するものがいくつもある。

これらを分類するとなると、大きく次のように分けられる。

## 日本の拳遊戯（下）

### ・動作か言葉か

何で対応するかであるが、動作を行うものと言葉で答えるものがある。

### ・正しく答えると良いのか、合うといけないのか

正しく答えるのが本来で、正しかったり合っていたりすると負けというのはひねって難しくしたものと考えられる。唐人拳・相談拳、医者役者芸者、取餅身持槍持がそうである。実際にやってみると、正しく答えるより、外す方が難しい。

対応の拳は簡単に思いつき、いくらでもバリエーションが増やせるものであるため、これらの拳が実際に行われていたものなのか、著者が考え出したものか見当がつかない。「お上げのお手を」が 冊の本に記述があるが、他のほとんどの拳はその本にしか記載がない。

しかし、似たような遊戯が酒席の遊びや子ども遊びとして行われたことは間違いないだろう。これらは拳という名称がついているが、拳を打つような動作は用いない。酒席の遊びに○○拳というものが多かったため、拳の文字を名前に付けたものであろう。それだけ拳の遊戯が酒席の遊びとして一般的であったことを示すものである。対応の拳が数多く作られた背景には、体や言葉を使うために道具が不要で行いやすかったことが挙げられよう。対応の拳はその後新しいものが作られているが、昭和以降は拳の名が付いていないことが多い。酒席・宴席の遊戯がバラエティーに富んできて、拳が中心でなくなつたためと考えられる。

### おわりに

拳遊戯には3つの種類がある。当て物拳とすくみ拳と対応の拳である。当て物拳は隠し当て物拳と同時当て物に大別できる。いずれも、拳を使うものや拳という名称を持つものである。総称して「じゃんけん」と言われることが多いが、「じゃんけん」はそのうちの一つの名称であって総称とするには相応しくない。当て物拳は、古代中国と古代ローマにあった。どちらも隠し当て物拳である。中国で生まれた蔵鉤は平安時代に日本に入った。同時当て物拳は江戸時代初期に中国から長崎に伝来した。本拳として江戸などでは一門や大会があるほど発展した。この要因は修練して強くなるという、柔道や茶道のような「道」的のものだったからであろう。このような発展は諸外国には見られないものである。すくみ拳は江戸時代に日本で誕生した。児戯や酒席の遊びでもあり、一方大人が真剣に研鑽する「道」的な浸透もし、さまざまな形を産んだ。大人の「道」的遊

戯としては藤八拳が本拳にとって変わり戦前まで流行した。一人決めの方法としては虫拳や虎拳が主流だったが、明治以降次第にじゃんけんが一般化した。地域により多彩な名称と掛け声があったが、情報網の発達とともに「じゃんけん」の名称と「じゃんけんぼん」の掛け声が多数派となっていった。ただ現在でも無数の名称と掛け声が存在しており、それはじゃんけんが実に幅広い年代と地域で行われたことを示している。じゃんけんは日本の海外進出とともに海外に伝播していった。諸外国にはそれまで合理的な一人決めの方法がなかったため、じゃんけんは急速に浸透し短期間で国際化した。じゃんけんに代表される拳遊戯がなかったことは、海外の研究者の報告により明らかである。

ただ文化と呼べるほどの重要性を認識されなかったため、誰も本気でそのルーツを探ろうという意識はなく、また守ろうという意識もなかったため容易に変更された。そのため多彩なバリエーションが生じた。しかしながら、拳遊戯は日本を代表する国民的遊戯である。その発生や広がり、世界に対する影響など、もっと深く研究されて良いものとする。

末筆ながらセップ・リンハルト教授に感謝の意を表したい。平成十年に教授の『拳の文化史』を読み、東京で講演を聴き、拳遊戯には日本人が知らない奥深い世界があることを知った。いつかは日本人の手でもっと詳しいものを書こうと思ったのが本稿執筆の動機である。平成十一年にリンハルト教授にお会いしたが『拳の文化史』の不明な点や誤りについては発刊後に読者から指摘があり、すでに理解しているとのことであった。その後、教授がそれを訂正する文献を発表する機会がなかったため、本稿では『拳の文化史』の内容に異議を唱える結果となった箇所が何点もあったが、リンハルト教授がすでに誤りを理解しているのは承知している。本稿を執筆するまで多数の資料を収集したが、それでもリンハルト教授が挙げた資料で見つけられなかったものがいくつもある。インターネットのない時代に詳細な資料を多数探し出した氏の苦勞はいかばかりかと拝察する。残念ながら氏の研究には遠く及ばないものとなったが、日本人の手による拳遊戯の研究としては過去にないものになったと考えている。

## 〔注〕

- 89) くもん子ども研究所編『浮世絵に見る江戸の子どもたち』（小学館、2000年）くもん子ども研究所編『遊べや遊べ！子ども浮世絵展図録』（NHK プロモーション、2003年）
- 90) とてつる拳については「日本の拳遊戯（中）」（2014年）197頁を参照されたい。
- 91) グリフィス、山下英一訳『明治日本体験記』平凡社、163頁
- 92) 中田幸平『日本の児童遊戯』社会思想社、383頁

## 日本の拳遊戯（下）

- 93) 下中直人編『世界大百科辞典』平凡社、184頁  
94) 安田徳太郎『日本人の歴史（I）万葉集の謎』光文社、114～115頁  
95) 赤穂敬也『じゃん・けん・ぽん』近代文藝社、102頁  
96) モーラについては「日本の拳遊戯（上）」（2013年）124頁を参照されたい。  
97) ミスター・スポック。SFドラマ『スター・トレック』の登場人物。バルカン人で形はバルカン人の挨拶。  
98) 石川欣一訳『日本その日その日 1』平凡社、186頁  
99) ドイツによくあった個人経営の小さな雑貨店とのこと。

### 【参考文献】

#### 第7章 じゃんけん

- William Griffis 『Mikado's Empire』 Harper & Brothers publisher、1876年  
Adel M Fielde 『A Corner of Cathay』 Norwood Press、1894年  
文部省『尋常小学読本』日本書籍、明治三十八（1905）年  
芦乃葉散人（菊池貴一郎）『江戸府内絵本風俗往来』東陽堂、明治三十八（1905）年  
Edward S Morse 『Japan Day by Day』 The Riverside Press、1917年  
佐藤清明「全国ジャンケン呼称集」『方言と土俗 第一巻第八号』橋正一、昭和六（1931）年  
「ジャンケンの掛声補遺」『方言と土俗 第一巻第十号』橋正一、昭和六（1931）年  
橋正一「岩手県のジャンケンの掛声」『方言と土俗 第二巻第三号』橋正一、昭和六（1931）年  
内田武志「静岡県のジャンケン呼称集」『方言と土俗 第三巻第十号』橋正一、昭和八（1933）年  
「ジャンケンの話」『朝日新聞昭和十三年六月五日号』朝日新聞社、昭和十三（1938）年  
木谷親鸞『改めて個人の認識』時代社、昭和十六（1941）年  
安田徳太郎『日本人の歴史 万葉集の謎』光文社、昭和三十（1955）年  
林屋辰三郎、多田道太郎、梅棹忠夫、加藤英俊『日本人の知恵』中央公論社、昭和三十七（1962）年  
「じゃん拳と片足跳び」浮田章一編『ほうげん 第3号』二松学舎大学方言研究会、昭和四十二（1967）年  
鈴木棠三『絵本江戸風俗往来』平凡社、昭和四十三（1968）年  
森銃三『明治東京逸聞史I』平凡社、昭和四十四（1969）年  
中田幸平『日本の児童遊戯』社会思想社、昭和四十五（1970）年  
芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第九巻「遊び」』三一書房、昭和四十九（1974）年  
加古里子『子どもと遊び』大月書店、昭和五十（1975）年  
小寺玉晃『尾張童遊集』『日本歌謡研究資料集成 第8巻』勉誠社、昭和五十二（1977）年  
岡田南校訂『俳風柳多留全集十二』三省堂、昭和五十三（1978）年  
尾原昭夫『日本わらべ歌全集7 東京のわらべ歌』柳原書店、昭和五十四（1979）年  
青木更吉『流山の伝承遊び（上、下）』斎書房、昭和五十四（1979）年  
服部勇次『日本わらべ歌全集12 愛知のわらべ歌』柳原書店、昭和五十六（1981）年  
村上公敏編訳『サルカメ合戦』筑摩書房、昭和五十七（1982）年  
ウィリアム・グリフィス著『明治日本体験記』平凡社東洋文庫、昭和五十九（1984）年  
工藤健一『日本わらべ歌全集2上 青森のわらべ歌』柳原書店、昭和五十九（1984）年  
かこさとし「じゃんけん遊戯考」『教育じほう 昭和五十九年一月号』東京都新教育研究会、昭和五十九（1984）年  
松本達雄、更科源蔵『日本わらべ歌全集1 北海道のわらべ歌』柳原書店、昭和六十（1985）年  
鈴木幸四郎『日本わらべ歌全集4上 宮城のわらべ歌』柳原書店、昭和六十一（1986）年  
「百科問答」『月刊百科 299号』平凡社、昭和六十二（1987）年  
ユネスコ・アジア文化センター編『アジアの遊び55 ラムラムリップ』蝸牛社、昭和六十二（1987）年  
大田才次郎編『日本児童遊戯集』平凡社、昭和六十四（1989）年  
嘉村国男他編『ながさきことはじめ』長崎文献社、平成二（1990）年  
三原幸久「じゃんけんとじゃんけん歌」『研究論集 第54号』関西外国語大学、平成三（1991）年

清水義範「ジャンケン入門」『清水義範本人の愛好本』講談社、平成三（1991）年  
 藤本浩之輔『明治の子ども 遊びと暮らし』SBB 出版会、平成三（1991）年  
 Stewart Culin『Korean games with notes on the corresponding Games of China and Japan』General  
 Publishing Company、1991年  
 川崎洋『日本の遊び歌』新潮社、平成六（1994）年  
 赤穂敬也『じゃんけんぼん』近代文芸社、平成七（1995）年  
 赤穂敬也『再考 じゃんけんぼん』近代文芸社、平成十二（2000）年  
 歌川広重「風流おさなあそび」（文政十三（1830）年）『浮世絵に見る江戸の子どもたち』くもん出版、  
 平成十二（2000）年  
 新里享敏「ジャンケン遊びの実際（50選）」『沖縄女子短期大学紀要 第17号』沖縄女子短期大学、平成  
 十二（2000）年  
 横堀肇「各国の「じゃんけん」システムの話（1／2）」『市街地再開発 第397号』（社）全国市街地再開  
 発協会、平成十五（2003）年  
 横堀肇「各国の「じゃんけん」システムの話（2／2）」『市街地再開発 第398号』（社）全国市街地再開  
 発協会、平成十五（2003）年  
 小学館辞典編集部編『日本方言辞典』小学館、平成十六（2004）年  
 李御寧『ジャンケン文明論』新潮社、平成十七（2005）年  
 杉本つとむ『語源海』東京書籍、平成十七（2005）年  
 田中ひろし『世界のじゃんけん』今人舎、平成十七（2005）年  
 加古里子『じゃんけん遊び考』小峰書店、平成二十（2008）年  
 山口佳紀編『暮らしのことば 新 語源辞典』講談社、平成二十（2008）年  
 島崎あかね『「じゃんけん」あそび』『児童文化研究所 所報 第号31』上田女子短期大学児童文化研究  
 所、平成二十一（2009）年  
 杉谷修一「ジャンケン遊びにおける三すくみとシンボル」『西南女学院大学紀要』西南女学院大学、平  
 成二十四（2012）年2012年  
 澤井明裕「とにかく「じゃんけん」でも勝ちたいから調べてみました」『奈良芸術短期大学紀要』奈良  
 芸術大学、平成二十四（2012）年

## 第8章 対応の拳

飄散人『絵本大人遊』寛政四（1792）年  
 飄散人『絵本続大人遊』寛政八（1796）年  
 鳥井正之助『秘芸の魁 拳独稽古』中島抱玉堂、明治二十五（1892）年  
 松室八千三『遊芸』鹿田書店、明治二十六（1893）年  
 猪里重次郎『酒席遊戯』玉潤堂、明治二十九（1896）年  
 大通散士『宴会お座敷芸』盛陽堂書店、明治四十四（1911）年  
 河尻清潭『酒席の遊び』笑社出版所、明治四十四（1911）年  
 清光館編集部編『現代娯楽全集』清光館、明治四十四（1911）年  
 小澤卯之助『本邦固有遊戯全書』国民教育社、大正四（1915）年  
 青文堂編集部『あごはずし』青文堂書房、大正七（1918）年  
 加藤美侖『是文は心得おくべし』誠文堂、大正十（1921）年  
 矢野貫一解題校注、芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第九巻 遊び』三一書房、昭和四十九  
 （1974）年